正信偈

教学研究所

東本願寺

真言宗大祖解釈信知佛恩深遠作
正信念佛偈曰
歸命无量寿如來　南无不可思議光
法藏菩薩因位時　在世自在王佛所
覩見諸佛淨土因　國土人天之善惡
建立无上殊勝願　超發希有大弘誓
五劫思惟之攝受　重誓名聲聞十方
普放无量无辺光　无碍无對光炎王

はじめのことば

帰命無量寿如来　南無不可思議光

これほどいのちにみち溢れた力強い平和な響きが、人類の歴史の上にあったでありましょうか。

「正信偈」は、親鸞聖人の御作であります。それを、仏前のおつとめとして用いたのは、蓮如上人であるといわれます。しかし、私たちの心は、「正信偈」の読誦をとおして、そのような史実の奥に、「正信偈」は誰が作ったのでもない、誰が用いたのでもない、大地から涌いてきた詩である、自然が符した生命の旋律であるということを感じとることができます。さればこそ、全国津々浦々、どのような辺鄙の賤が伏屋にもこのうたは生まれ、そのとばりから流れる声は、久遠の過去から悠久の未来をつくして三千世界にひびきわたるのであります。

「正信偈」の一句一句は密度の高い透明な宝石を思わせます。しかし、そこからは歴史の星霜風雪にたえてきたというような岩石の固さは少しも感じられません。空しく華やかな歴史の底を地下水のように静かに確実に流れてきて、七百年前に地表にあらわれた、そして、ささや

かな流れとなって、疑惑の人には真実を、あらそいの人には和らぎを、憂いの人には慰めを、怠惰の人にはきびしさを、というように、生命の源泉として、われわれの生活を潤してきたのであります。愛欲も名利も、人の世の悲喜哀歓ことごとくを摂め包んで、名もなき凡夫として安んじて生き、安んじて死んでゆける生活純化の場所として働いてきたのであります。

「正信偈」こそは、念仏の教徒の歴史として、われわれの親たちの、そこに始まり、そこに還る生活のよりどころでありました。そこには、あらゆる人びとの願いがあきらかにされ、実現されてあるといえるでしょう。われわれ一人ひとりの心にひびくその願いが、野をこえ山をこえ海を渡って、遠く深く、やがては世界の人びとの心を一つにする一大交響曲となる意義を思わずにおれません。

東本願寺

もくじ

正信偈について……六
偈前の文……一一
題目 正信念仏の讃仰……一三
名としての仏……一五
本願の洗練……一八
よびさます光……二六
本願の行信……三三

出世の正意……三五
慶心一味……三八
摂取の光明……四三
横超の大道……四六
無上の法……五一
正信の歴史……五五
大乗無上の法……五七
易行の大道……六二
一心の顕彰……六六

無碍の光益……七〇
楽邦の菩薩……七六
本願他力……八二
慇懃の教え……八九
独明の仏意……九六
大悲無倦……一〇四
選択本願の念仏……一一一
唯信の伝統……一一八

正信偈について

「正信偈」は、つぶさには『正信念仏偈』といわれ、浄土真宗の朝夕の「おつとめ」に用いられて、数ある聖教のうちでも、もっとも親しまれている聖典の一つであります。

これは、いうまでもなく、親鸞聖人の著された『教行信証』の「行巻」の最後にのせられた、七言百二十句の偈頌ですが、聖人は「正信偈」をのべられるにあたって、

「しかれば大聖の真言に帰し、大祖の解釈に閲して、仏恩の深遠なるを信知して、正信念仏偈を作りて曰わく」

と、まずその基づく背景と動機とをのべておられます。「大聖の真言」というのは、仏の精神を明らかにした『大無量寿経』をいい、「大祖の解釈」とは、『大無量寿経』の仏の精神をうけとられた三国七高僧の論・釈のことで、したがって、「正信偈」の内容は、「大聖の真言」によって仏のこころを讃えられた「依経分」と、「大祖の解釈」を要約せられた「依釈分」とからなっております。

いわば、「大聖の真言」とは、仏によって人間の本当の問題がとりあげられ、しかもそれが

答えられてあることばであります。したがって、われわれがそれを聞くことを通して、真に自己自身を回復するというはたらきをもったことばが「真言」であり、そのことばを受けとり、真に自己にめざめ、自己を確立してゆかれた方々のことばが「大祖の解釈」の意味であります。そういう歴史を通して、自己の信仰の道を見い出されたのが、親鸞聖人です。したがって、「真言」と「解釈」に、浄土真宗のすべてがつくされているといってよいでしょう。そうした背景によって生み出されたのが「正信偈」であり、そこに親鸞聖人の全体があるのであります。

「正信偈」は、勤行に用いるために独立して作られ、「行巻」に編みこまれたものか、「行巻」の一部分として作られ、それが勤行として用いられるようになったのか、明らかではありませんが、「行巻」にあるということによって、いよいよ浄土真宗の仏法が、同一念仏の同朋生活道をはなれてはないという意義が明らかにされております。それゆえに、念仏の道場における「おつとめ」に、無比の価値をもった聖典として、日夜、親しくうたわれるのです。

正信偈

〔偈前の文〕

爾者帰二大聖真言一　閲二大祖解釈一
信二知仏恩深遠一　作二正信念仏偈一曰

【読方】　しかれば大聖の真言に帰し、大祖の解釈に閲して、仏恩の深遠なるを信知して、①正信念仏偈②を作りて曰わく、

【文意】　真実を求めつつ、そのまことの何者かを知らないゆえに、果てなくさまようた旅路の末、生ける屍となっていたわたくしたちのために、大聖世尊はその真実を如来の名に示して、真生の扉を濁世におひらき下さった。この真実のみ言こそ、民族と時代を異にしても、苦悩の群萠をすくう無上の宝である。そのことはさらに、これを身にうけて伝えられた三国の高僧の説をひらきみて、いよいよ明らかとなった。かほどに深いあわれみをこの身にかけられた深

①**正信念仏偈**　念仏を正信する偈。「正信」とは正しい信心のことで、まことの心。何ものにも破れずかたむかず、乱れぬ心。すべてをありのままに映す透明な心。また喜びの心でもある。純粋な信仰の意識をいい、この心は仏の本願にめざめた心であるから、如来よりたまわるもの（回向）であり、如来の心であるともいえる。「念仏」とは人間の方から仏を念ずるというようなことではなく、人間の問題が人間のはからいを超えてすでにこたえられてある法、すなわち南無阿弥陀仏のこと。したがって「念仏を信ずる」とは念仏を対象にすることではなく、「ただ念仏して」と人間のはからいの尽きたのが正信である。念仏をもまた信ずるというのではなく、あるものは「ただ念仏」、念仏の全体が正信である。したがって、その信はどこにもある信ではない。念仏によってはじめて立てられた信である。それは私が信ずるにはちがいないが、念仏の中にわれわれが召され、念仏の中に自己が見出される。念仏がどこかにあって、それを信ずるのではなく、信として念仏が行ぜられる、その信において、「ただ念仏」というのである。

②**偈**　梵語 gatha 伽陀・偈陀を略して「偈」という。諷頌と訳し、梵・漢あわせて偈頌ともいう。信仰の表白が讃歌の形をとったのが、偈頌である。それゆえ偈頌は歌という文章形式をあらわすとともに、讃歌という内容からいえば、礼拝

くして遠い仏の御恩を、今さらのごとくに喜ばずにおられないのである。この御恩にむくいるために『正信念仏偈』と題し、正しくして純一な信心の智慧を、如来の名たる念仏に摂めて、愚鈍の衆生にめぐまれた仏と仏とのおんはからい、祖と祖との伝統のご苦労をほめたたえて、あまねく人びとにおくりたいと思うのである。

問題点

1、序とは何か。

2、「恩」とは、日常どんな形であらわれているか。

〔題目――正信念仏の讃仰――〕

正信念仏偈

【要点】『正信念仏偈』略して「正信偈」という。偈とはいうまでもなく、偈頌すなわち歌である。歌は感動の表現であって、感動するところに全体がある。その全体を直接に表現する方法が歌である。その意味で「正信偈」に

と讃嘆という宗教的実践が語られている。礼拝は無条件で自己の全体を投げ出せるものに遇ったところに成り立つ。讃嘆とは、その出遇いが万劫の初事として、遇い得ざるものに遇ったという感動である。それによって、はじめて人間が真に人間として完成するのだということ、そういう宗教体験が礼拝と讃嘆の形をとって表現されてくるのである。したがって、偈頌はたんなる芸術作品というものではなく、本当に深い自己自身の問題がこたえられたという感動があふれているものなのである。

は、聖人の信仰のすべてが尽くされているといってよい。「正信念仏」という偈の名からいえば、正しく念仏が受けこまれた自覚道を讃嘆するものであって、一句一句が念仏の信仰の全体なのである。「正信偈」を拝読する上においても、それが宗教的感動を生命とした讃歌であるという一貫した姿勢を見失ってはならないであろう。

【参考】《六要鈔》正信偈は百二十句、行の数は六十なり。これ三朝の高祖の解釈によって、ほぼ一宗大綱の要義を述ぶ。偈の初句より「無過斯」にいたるまでの四十四句・二十二行はこれ『大経』の意なり。「印度」以下四句・二行は総じて、三朝の祖師同じく浄土の教をあらわす意を標す。「釈迦」以下の十二句・六行の文は、これ龍樹の讃にして、そのはじめの四句は『楞伽経』により、次の八句はこれ『十住毘婆娑論』による。次の十二句・六行の文はこれ天親の讃にして、『浄土論』による。次の十二句・六行の文はこれ鸞師の讃にして、『論註』の意による。次の八句四行の文はこれ綽公の讃にして、『安楽集』による。次の八句・四行の文はこれ大師（善導大師）の讃なり。次の八句・四行の文はこれ恵心の讃にして、『要集』の意による。次の八句・四行の文は空聖人（源空）の讃にして、『選択集』による。次の四句はこれ総結なり。　問う、「正信偈」とはこれ何の義ぞや。　答う、正とは